巻頭言

公害対策に思うこと

伊　藤　克　三*

私の家の南に道路を距てて走る電車線路の高架工事が今年度から始まることになりました．25年前ここに移ってきたのは，庭にバラを作るのが目的で，線路がいつまでも庭の日当りを守ってくれるものと考えてのことで，騒音は覚悟の上でした．まさか線路が高架になろうとは．見通しが甘かったともいえますが，今日の社会の変化の速さを痛感しているところです．

建設工事にかかる環境問題に関してはこれまで少なからず関係してきましたが，自分が周辺住民の立場に立とうとは予想もしませんでした．いわば被害者の立場になったからといって住民エゴを出す気は毛頭ありませんが，ここでの率直な感想と，あわせて今日の環境問題への対応のあり方に若干の私見を述べたいと思います．

高架工事が決定したのは数年前，一応説明会が開かれましたが，その時は既にすべてが決定した上でのこと，こうした沿線居住者を無視した押しつけの姿勢にまず反撥を覚えざるを得ませんでした．その必要性，効果は説明を聞くまでもなく，強いて反対するものではありませんが，これによる利益は沿線住民の環境劣化という犠牲のもとに得られるものであることを意識した対応をしてほしかったと思います．力ではなく，沿線の迷惑にはできる限り報いようとする，温い血の通った対応がなさるべきではないでしょうか．騒音，日照などが規制値を満たしてはいても，これによる住宅地の環境劣化は免れないものですから．

この頃は，環境に影響を与えることが予想される事業を行う際には，その影響の有無，程度を多面にわたり詳細に予測し，その結果をふまえて計画の決定，公害の防止を策定する方法が取られていることは周知の通りです．この環境への影響評価を行う対象が広がってきたことは喜ばしいことですが，反面，これが一つの手続きとして形式化し，単なる数値合わせのために無駄な出費をしているように見受けられる場合もなくはありません．むしろ，被害者の環境整備にこれを向けて誠意のあるところを示すべきではないかと思います．両者の間に気持が通じ，こだわりがなくなれば，一部の高速道路に見られるような，異様なばかりの防音壁は造られずに済んだのではないでしょうか．高い壁で囲まれた谷底のような道を走るたびに，これがその建設当時の経緯を物語っているように感じ，いやな思いをするのは私だけでしょうか．

*伊藤克三（Katsuzo ITO），大阪大学，名誉教授，摂南大学，工学部，建築学科，教授，工学博士，建築環境工学